

江戶時代文雅人名錄刊行之經緯（一） 從書誌學的角度探討明和六年刊行之 『古今諸家人物志』

小林幸夫*

摘要

「文雅人名錄」完成於日本近世（江戶）後期。研究「文雅人名錄」對江戶時代的智識階層能有一定程度的瞭解，因此必須弄清楚究竟「文雅人名錄」是如何編制完成的，因為瞭解其原委方能明白「文雅人名錄」的史料價值。本稿是研究「文雅人名錄」的第一個單元。

具體而言本文是針對明和六年（1769）江戶時代，所刊行的『古今諸家人物志』其出版者、編者及記載內容加以研究分析。得出以下二個結論：

(1)記載內容集中在當代已故者身上，對於當代人物的記載不夠完全，而且在各不同學派中有關當代人物的記載又依出版者的偏好而有所限制。

(2)與出版者的交誼密切與否會直接影響到記載內容，因此本文無法全面掌握江戶時代智識階層之全貌。

因此透過『古今諸家人物志』來對十八世紀中期的江戶時代的智識階層進行分析研究會出現不完整性。

關鍵詞：江戶、知識社會、文雅人名錄、『古今諸家人物志』、

奧村（佐野屋）喜兵衛、前川六左衛門、萬釋庵奧村意語

江戸における文雅人名録刊行までの経緯（一） —明和6年の『古今諸家人物志』 の書誌学的検討—

小林幸夫*

要旨

本稿の目的は、近世後期の江戸の知識人社会を知るための手段としての文雅人名録が、どのような経緯を通じて作られるようになったか、という問題を明らかにすることにある。また、この検討を通じて、文雅人名録の資料的性格を明らかにし、今後の近世知識人研究に文雅人名録がどの程度有効な資料であるかを明らかにすることにある。

第1部にあたる本稿では、具体的には、明和6年（1769）に江戸で刊行された『古今諸家人物志』の分析を行なった。板元・編者・記載内容の分析を通じて、①出版者の交際範囲と記載内容に密接な関連がある。したがって、江戸の知識社会を包括的、且つ、総合的に把握したものではない。②記載内容が、物故者に集中して、現存者の記載が不十分である。また、現存者の記載は分野・学派的な偏りがある。したがって、この『古今諸家人物志』をもって、18世紀中期の江戸の知識人社会を分析すると、偏りが生じる。以上の点を明らかにした。

キーワード：江戸、知識人社会、文雅人名録、『古今諸家人物志』、
奥村（佐野屋）喜兵衛、前川六左衛門、万釈庵奥村意語

The circumstance of publishing the 'Bungajinmeiroku' Part 1

Kobayashi Yukio*

Abstract

The purpose of this report is to make it clear on what was the circumstance when the 'Bungajinmeiroku's were published. And I hope to identify its historical value for the research of intellectual society in Edo period.

In chapter 1, I analyzed the publishers, editor and contents of the 'Kokonsyokajinbutushi' published on 1769. I found two points. 1. the 'Kokonsyokajinbutushi's contained mainly former intellectuals, not so many living intellectuals at that time were included. 2. For those included living intellectuals, they were mostly constricted by the preference of publishers. So it is hard to say that those living intellectuals could not represent the whole intellectual society at that time. Therefore, it is not enough for us by using 'Kokonsyokajinbutushi' to analyze the intellectual society in Edo on mid 18th century.

Key words: Edo, intellectual society, 'Kokonsyokajinbutushi',
Kihei Okumura(Sanoya), Rokuzaemon Maekawa,
Manshakuan Igo Okumura

江戸における文雅人名録刊行までの経緯（一） —明和6年(1769)の『古今諸家人物志』 の書誌学的検討—

小林幸夫

1. はじめに

筆者はかつて文雅人名録を用いて、江戸の知識人の分布図を作った¹。ここで文雅人名録と呼んでいるものについては、すでに定義したことがあるが²、ここに再び掲示したい。「近世中期以降、武鑑・儒者譜・番付などさまざまな形式で現存する人物を集成した人名録が出版された。本稿では、このような人名録中、当時学者・文人と称された人々を、いずれの分野をとわず現存する人物を中心に掲載した地域的人名録を文雅人名録と総称することとする。」

ここで、一番重要な要素は「いずれの分野をとわず現存する人物を中心に」ということである。当該地域における知識人を知ろうとするとき、分野別の人名録では全体が把握できない。また、日本全国を掌握しようとした人名録では、交通・情報の十分に発達していなかった江戸時代に詳細な、かつ、正確な把握は困難である。特に現存者に関して行うことは困難である。たとえば、実際に刊行された『儒林姓名録』³の場合、物故者を掲載している。ある時代にある地域でいかなる文化的活動が行われていたか。最近はやりの表現を借りるならば、「知の現在」を知るには、地域別の現存者を集めた人名録以外に有効な手段がない。このような事情から、注1で述べたように江戸東京博物館の展示においては、化政・天保・安政という江戸時代後期の江戸の知識人を知る手段として、表1の◎を付けた文雅人名録を使って図を3枚作成した。実は、計画ではこの3枚の

¹東京都立江戸東京博物館「近世の学芸」の展示として公開している。

²小林幸夫（1988：27-36）

³明和6年刊、板元は京都の西村市郎右衛門、林伊兵衛。

図以外に、宝暦～天明（18世紀後半）の図も作成する予定であった。しかしながら、なかなか困難な作業であって、未だ完成を見ていない。その理由は本稿で分析するように、使用する資料の制約が大きいからである。

また、表1にみられるように、江戸において文雅人名録が出版される

刊行年	京都	大坂	江戸	資料
1768	136			『平安人物志』明和五年版
1775	153			『平安人物志』安永四年版
		197		『浪華郷友録』安永四年版
1782	201			『平安人物志』天明二年版
1790		330		『浪華郷友録』寛政二年版
1813	392			『平安人物志』文化十年版
1815		195		◎『江戸当時諸家人名録』文化十二年
1818		138		◎『江戸当時諸家人名録二編』文政元年
1822	525			『平安人物志』文政五年版
1823		299		『続浪華郷友録』文政六年版
1823		256		『浪華金襴集』文政六年
1824		250		『新刻浪華人物誌』文政七年
1830	717			『平安人物志』文政十三年版（近国33を含む）
1836		471		『当時現在公益諸家人名録』天保七年
1837		240		『続浪華郷友録』天保八年版
1838	626			『平安人物志』天保九年版（近国46を含む）
1842		598		◎『江戸現在公益諸家人名録二集』天保十三年
1845		290		『浪華名流記』弘化二年版
1848		259		『浪花当世人名録』嘉永元年
1852	738			『平安人物志』嘉永五年版（近国56を含む）
1856		135		『浪華名流記』安政三年版
1860		1021		◎『安政文雅人名録』安政七年
1861		668		『江戸現在公益諸家人名録三集』文久元年
1862		1155		『文久文雅人名録』文久二年
1867	490			『平安人物志』慶応三年版（近国21を含む）

ようになるのは、京都・大坂に比べて相当に遅れる。京都においては、1768年に『平安人物志』初篇が出版された。大坂においても、1775年に最初の『浪華郷友録』が出版された。これに比して、江戸で最初の文雅人名録が出版されたのは1815年のことである。約50年の差がある。江戸が文化的に後進地域で、知識人の人口が少なく、文雅人名録の編纂に値しなかったわけでは決してない。事實はむしろ逆で、18世紀後半になると、江戸が京都・大坂を凌ぐ文化センターに成長していた。『雲室随筆』の筆者僧雲室は、信州飯山から遊学を目指していた明和4～6年頃の回顧として

隣寺に称念寺とて東本願寺末のありしが、二子にて自天上人とて久敷京都にて学問せし人なりけるが……此人世典を好て、京都にて河野齋林周助などに学ばれしと云。……予もいつし

か世典を学たくて自天上人に問しに、儒典の事は江戸に如はあ
らじ、今も彼是豪傑多と聞と咄されしが、それより頻に江戸に
遊びたくおもへども……⁴

と述べて、京都遊学経験者の自天上人から「儒典の事は江戸に如は
あらじ、今も彼是豪傑多」と聞いて江戸への遊学を希望するよう
になったと述べている。京都における『平安人物志』や大坂における
『浪華郷友録』の刊行目的の一つが、「此編之作為他邦人遊学於京師
者輯焉」、「凡姓名下註字号且記居所及俗称以便諸生投刺矣」⁵「此編
也録今時操觚諸子之姓名及通称居趾而專便于通好之用」⁶とあるよう
に、地方からの遊学者を誘致することにあつた。むしろ、京都・大
坂の方が、江戸に対抗するために早期に文雅人名録を編纂し、地方
に対する影響力の維持を図る必要があつたといえる。

それでは、なぜ、江戸における文雅人名録の刊行が大幅に遅れた
のであろうか。江戸という都市の住民が自身のアイデンティティー「江
戸っ子」意識を形成するのはようやく18世紀後半にいたってからで
ある。⁷この時期になると、第1章で述べるように、出版の分野で江
戸の書物問屋仲間が京都に対抗する動きを示すようになる。一方、
京都においてはすでに戦国時代（16世紀）に「町衆」という町人の
共同体意識が形成された。この共同体意識を基盤として、伊藤仁斎
は儒学の解釈をし、古義学を提唱した。⁸この町衆意識の下で、ある
種の「学問の自由」と「寛容」が生み出され、さまざまな分野の知
識人が共存共栄を図る雰囲気生まれたのではあるまいか。一例と
して、伊藤東涯の『近思録説略』への序文を見ることが出来る。

近思録説略序

予近與澤田常省翁相識。隱屏丹州。時至都下。見過弊廬。云。男
希自幼嗜学。覃思經籍。弱冠為会津侯所識。擢居儒職。嘗著近思

⁴ 積雲室（1979：78）

⁵ 『平安人物志』明和5年版凡例

⁶ 『浪華郷友録』安永4年版凡例

⁷ 西山松之助（1975）、西山松之助（1981）、参照。

⁸ 三宅正彦（1987）、参照。

録解。已成帙。願弁一言其首。予以宋朝儒先之説。與先人之旨不同。辞之再四。……曰。願因子之言。以託不朽。辞而不可。乃予心竊自許曰。唯叙其交際之好。蚩雪之勞。以応之亦何不可。而未果。歲月荏苒。杳無消息。頃日翁來叩予門。曰。向所告書梓將成。而希也不幸。溘先朝露。予年八旬。唯有一息。日望其成立。而今如此。冀託子之筆。寿予兒之名於永世亦足矣。淚與言下。予情不忍拒。乃諾曰此書也。考覈精詳。援拋明悉。探濂洛之旨。而窮其源委。其才之敏與業之勤。既有以過乎人。則其書之伝哉必。固不待予之言矣。唯恨不相聚一堂親接声歎。商確論辨。以帰于一是之地耳。吾豈敢謂人之心如吾之心乎。彼不有得焉。則我得矣。不永其天悵也奈何。遂叙其言。以寓掛劍之意云

享保五年庚子秋九月

京兆伊藤長胤序并書⁹

伊藤東涯は伊藤仁斎の長子で、父の古義学を継承し、父の草稿を整理し、『論語古義』『孟子古義』をはじめとする古義学の図書を刊行した。したがって、学問的には朱子学に対して反対する立場にある。『近思録』は、言うまでもないことであるが、朱熹が先輩たちの言説のうち、朱子学理論に適合的なものを集めて編纂したものである。したがって、この序文は、反朱子学者が、朱子学のバイブルに序文を書いているということになる。序文の中で「予以宋朝儒先之説。與先人之旨不同。」と言っているように、東涯自身が思想的立場を異にしていることは自覚している。それにもかかわらず、著者の父から息子の遺稿となったこの『近思録説略』に序文を依頼され、「予情不忍拒。」と情に絆されて序文を書いている。そして「此書也。考覈精詳。援拋明悉。探濂洛之旨。而窮其源委。其才之敏與業之勤。既有以過乎人。則其書之伝哉必。固不待予之言矣。」と賛辞を述べている。このような学問分野・学派を超えた交流があって初めて文雅人名録の成立をみるのではなかろうか。

⁹澤田希（1720）

一方、江戸においては、ようやく 18 世紀半ばに江戸の地域的連帯感が形成されてきた。しかし、その後 18 世紀末に、知識人の間に深刻な対立を見るようになる。その最大の理由は、寛政改革の一環として行われた異学の禁にあるといえる。この点については、第 2 章の中で触れようと思う。

最後に、江戸における文雅人名録の編者に就いて考察したいと思う。その理由は、さまざまな分野の現存者を編纂できる情報を編者はどのようにして手に入れていたか、彼の手に入れている情報が現実を忠実に反映しているか、史料価値にかかわる問題があるからである。表 1 から分かるように、江戸においては、幕末になると 2 系統の文雅人名録が刊行されるようになっていく。文久には文久元年（1861）に『江戸現在広益諸家人名録三集』が出版され、翌年『文久文雅人名録』が出版されている。前者は、668 名を記載し、後者は 1155 名を記載している。形式は同様であるが、内容に相当の差がある。特に掲載分野に差があり、後者は俳諧の分野の人物を大量に掲載している。後者は 1860 年に刊行された『安政文雅人名録』の改訂版であり、前者は 1842 年に出版された『江戸現在広益諸家人名録二集』の改訂版である。別の出版社から相当色合いの異なる文雅人名録が出版されているわけで、地域文化の分析のための資料として用いるときに、資料の性格をより吟味する必要がある、そのために、編者に関する知識なしでは誤った情報なり、偏った情報を基に分析することにもなりかねないからである。本稿では、江戸における最初の文雅人名録である文化 12 年（1815）『江戸当時諸家人名録』の編者扇屋伝四郎に焦点を当てて分析したいと思う。

2. 明和 6 年刊行の『古今諸家人物志』について

私が文雅人名録と呼んでいる形式の人名録が出版される以前のものどどのように違うかを説明するために、いくつかの人名録の形式について検討してみたい。

まず、最初に取り上げたものは、江戸で明和 6 年（1769）に出版

された『古今諸家人物志』である。この年は、『平安人物志』初編が出版された翌年にあたる。出版地は江戸、奥書の板元は奥村嘉七となっている。

2.1 『古今諸家人物志』の板元と編者

江戸の書物屋仲間¹⁰の『割印帳』¹¹によれば「明和六年丑九月廿六日」の記録に「古今諸家人物志 全三冊 万积庵 墨付百十一丁 板元 前川六左衛門、奥むら喜兵衛」とある。¹²二編・三編が引き続き出版されることになっており、出版許可申請もそのようになっているが、奥書にあるように、「近日常来」の予定であった様で、明和6年に実際に出版されたのは一冊のみのものである。¹³

¹⁰ 享保年間(1716～1735)に幕府が物価・流通統制や風俗統制を目的として、業種別に商人に一種のカルテルである株仲間を公認して価格や流通量を統制させた。その一環として、出版業者に対しても書物屋仲間の公認を行った。この書物屋仲間に加わっていないものは出版・販売ができないとともに、幕府からの新規出版物の許可取次ぎを書物屋仲間が行った。最初に書物屋仲間が公認されたのは、享保元年(1716)の京都においてであり、その人数は約200軒であった。ついで享保6年(1721)江戸の書物屋仲間が公認され、その人数は47軒、そして享保8年(1723)に大坂の書物屋仲間が公認され、その人数は24軒であった。書物屋仲間では月行事を決め、新規出版物が幕府の法令に違反していないかをチェックするとともに、出版される書籍について隔月に幕府に届出をした。江戸の書物屋仲間屋仲間は、自ら出版するものだけでなく、京都・大坂などの江戸以外から仕入れて販売する書籍に関しても同様にチェックした。上里春生(1965)、今田洋三(1977)、参照。

¹¹ 書物屋仲間の月行事が新刊書の開版販売許可のために奉行所に提出した書籍目録の仲間控帳、いわば出版の公式記録簿。朝倉治彦・大和博幸(1993)に翻刻出版されている。ちなみに、現存する資料は、享保12年(1727)から文化12年(1815)までの89年間のものだけである。

¹²朝倉治彦・大和博幸(1993:179)

¹³ 『古今諸家人物志』が最終的にいつ何冊で出版されたかについては、不明な点が多い。『国書総目録』によれば、三巻三冊とあり、明和6年(1769)版と、文政7年(1825)版があることになっている。森銑三の『読書日記』昭和十三年(1938)一月二十三日の項に、「加賀文庫本『古今諸家人物志』三冊、明和六年の版にて、間々珍しき記載あり。……この書二部を較べ見るに、その版に異同あり、綴ぢ方もまちまちにて、丁数も揃はず、両者の一致せざるもの多し。」として、日比谷図書館加賀文庫の3冊の『古今諸家人物志』を読んだことが記されている。ただし、「この書二部を較べ見る」とあるように、三冊セットであったのか、2部あわせて三冊であったのか不明である。また、文政12年(1829)に青柳文蔵が『続諸家人物誌』を編纂している。その「例言」に「此編ハ旧刻人物志ノ遺漏ヲ補フヲ主トス。儒家・文人・国学和哥・有職故実・書画・緇流ニ至マデ芸苑ニ係ル者ハ悉クコレヲ載ス。故ニ旧刻ニ数字ノミ在テ著述ノ目・卒年ナトナキ者ハ今コレヲ可載テ間々重複セル者モアルハコレカ為ナリ。」(長野県飯田市立図書館蔵、写本)とあり、『諸家人物志』の

『古今諸家人物志』奥書の「奥村嘉七」と『割印帳』の「奥むら喜兵衛」は同一人物と看做してよいであろう。¹⁴奥村喜兵衛は屋号を佐野屋 喜鶴堂と称して、江戸の芝神明前三島町に住んでいた。¹⁵先の『割印帳』の集計によれば、奥村喜兵衛は寛延元年(1748)から天明8年(1789)までの42年間に、板元19、板元売出54、売出21、その他9、合計103点の出版記録がある。¹⁶その内容は、『論語集解義疏』『四書字引』『唐詩帖』『絶句解字引』『唐詩礎諺解』のような漢籍から、『外科訓蒙図彙』のような医学書、『茶事交会一致』『茶人氣質』のような茶書、『女用文教訓大全』『長雄書札文集』『紙江節用集』『長雄女今川』のような学習書、『ゑ本江戸ミやげ』『絵本友千鳥』『絵本金平武者』『絵本紅梅武者』のような絵本類、『分間江戸絵図』『江戸中絵図』のような地図類、『狂哥友かゝミ』『狂哥訓』のような狂歌本と、さまざまなジャンルにわたって多数の出版・販売を手がけている。¹⁷ちなみに、『古今諸家人物志』出版の前年の明和5年(1768)に出版された『平安人物志』の江戸での販売元はこの奥村喜兵衛である。¹⁸奥村喜兵衛の出版申請は天明8年(1788)まででそれ以降ないが、これは彼が書物問屋仲間から離れ、地本草紙問屋仲間に移ったためと考えられる。天明9年以降も本屋として営業してい

続刊が文政12年に編纂されていることが知られる。この種の人名録は森氏も指摘しているように、人名の差し替え、丁数の変更など、異同が大変に多いことが特色である。本稿では、筑波大学所蔵の『古今諸家人物志』によって、以下のデータ処理を行うことにする。

¹⁴ 江戸時代の通称は代々同じ通称を継承していることが多い。例えば、相板の前川六左衛門の場合は、『割印帳』に寛延2～文化11年(1749～1814)の66年間にわたって「六左衛門」の名で2～3代(あるいはそれ以上)にわたって同一の通称を用いている。つまり、『割印帳』に記載され「柎驕 u 喜兵衛」や「六左衛門」は個人名ではなく店名の一部である。一方で、個人としての通称もある。この場合、当主になると同時に「家」の通称を名乗ることが多いが、併用される場合もある。

¹⁵ 井上和雄(1916: 35)

¹⁶ 坂本宗子(1982: 372)

¹⁷ 坂本宗子(1982: 131-133)

¹⁸ 朝倉治彦・大和博幸(1993: 171)には「明和五年子九月廿七日割印」の項に「同(=明和)四亥三月 平安人物志 全部一冊 作者弄翰 墨付十八丁板元京都 百足屋次郎兵衛 売出 奥村喜兵衛」とある。出版前年にすでに販売許可を申請していることから、その出版にある程度関与した(例えば資金的な協力など)事も考えられる。

たことは、嘉永6年(1853)の記録に「地本草紙問屋元祖古組」の中に「芝三島町長兵衛店 佐野屋喜兵衛」¹⁹と名を連ねていることから知られる。地本草紙問屋仲間の月行事も務めていることから、ある程度の規模を持った書物問屋として幕末まで営業していたことが分かる。天明9年以降の佐野屋喜兵衛の出版したものとして、以下のようなものが知られている。²⁰

改算記綱目大全 寛政6年(1794)

玉之枝五巻 森羅子 享和2年(1802)

ぬしや誰問白藤六巻 市川三升 文政11年(1828)

復讐相宿噺六巻 五柳亭徳升 天保3年(1832)

江戸紫手染色揚前編上 式亭小三馬 天保8年(1837)

絵図見西行六篇上 山東京伝 天保13年(1842)

教訓乳母草二巻 山東京伝 天保6～弘化4年(1835～1847)

琴声美人録三・四 山東京伝 嘉永3年(1850)

根源実群開一七編 笠亭仙果等 嘉永5～文久2年(1852～
1862)

娘庭訓金鶏初編上下 山東京山 安政3年(1856)

西国奇談四〇巻 為永春水 文久2～明治8年(1862～1875)

春色墨田川二冊 二世柳亭種彦 文久3年(1863)

このように化政期以降の佐野屋喜兵衛は山東京伝・山東京山・式亭小三馬・二世柳亭種彦・為永春水(二世あるいは三世か)などの戯作者のものを中心に出版する地本草紙屋として営業を続けていたことが分かる。上に掲げた書籍のうち、『割印帳』に記録の残る文化12年(1815)までに刊行されたものが3点あるが、このうち『改算記綱目大全』だけが記載されている。ただし、「寛政六甲寅再板 改算記綱目 全一冊 墨付百七丁 板元願人 前川六左衛門」²¹とある。本稿で考察の対象としている『古今諸家人物志』の相板として『割

¹⁹上里春生(1965:138)

²⁰矢野玄亮(1976:102)

²¹朝倉治彦・大和博幸(1993:311)

印帳』に記載されている前川六左衛門の名義で出版されている。佐野屋喜兵衛と前川六左衛門の深い関係を知る術にはなるが、なぜ佐野屋喜兵衛の名で出版されなかったのかは、はっきりしない。おそらくは、書物問屋仲間から外れたために前川に名義を借りたのであろうか。その他の2点は『割印帳』に記載がない。享和2年(1802)に出版された『玉之枝』五巻の著者森羅とは洋学者・戯作者である森島中良のことである。また、文政11年(1828)に出版された『ぬしや誰問白藤』六巻の著者市川三升とは、歌舞伎役者5代目市川団十郎である。書名・著者名から推察して、「物の本」ではなく、「草子」のようであるから、幕府への届出もないまま出版されたのであろう。

表2. 江戸の板元別出版点数(上位10人と奥村喜兵衛)

	営業期間	年数	営業地	板元	板元売出	売出	他	江戸計
須原屋茂兵衛	享保12～文化12	89	江戸	31	282	803	31	1147
西村屋源六	享保12～文化12	89	江戸	46	316	418	45	825
前川六左衛門	寛延2～文化11	66	江戸	11	191	256	18	476
吉文字屋治郎兵衛	寛延4～寛政4	42	江戸	19	124	152	7	302
須原屋伊八	安永元～文化11	43	江戸	6	149	102	20	277
小川彦九郎	享保12～天明4	56	江戸	32	54	152	7	245
須原屋新兵衛	享保12～文化11	88	江戸	14	151	46	21	232
須原屋市兵衛	宝暦10～文化10	54	江戸	6	133	36	31	205
伏見屋藤三郎	享保11～安永3	49	江戸/大阪	25	43	132	2	190
万屋清兵衛	享保12～宝暦9	33	江戸	13	79	48	2	142
佐野屋(奥村)喜兵衛	寛延元～天明8	41	江戸	19	54	21	9	103

「板元別出版状況一覧」(『享保以後板元別書籍目録』所収)より作成

²²その後の出版物も「草子」に当たるものばかりである。

前川六左衛門は、屋号を崇文堂と称して、江戸日本橋南2丁目に住み、書物問屋仲間南組に属していた。表2で見るとおり、『割印帳』に記載された点数から見ると、前川六左衛門は第3の規模を誇る大書店である。日本橋南2丁目という江戸の商業の中心地に店を構えた江戸根生の書物問屋で、近世中期まで出版の中心であった京都の書物問屋に対して挑戦的な行動を取っていた。前川六左衛門は『楚

²²江戸時代の出版物は大きく分けて、「物の本」と「草子」に分けることが出来る。「物の本」とは今日で言う学術書に当たるもので、表紙も厚紙を使ったハードカバー仕立てであり、一方「草子」とは、小説・絵本・啓蒙教訓書などの童蒙婦女の手にする書で、表紙も薄く娯楽性の高いものを指す。幕府が出版の取締りの対象にしたのは、主として「物の本」であって、「草子」は『割印帳』に記載されることもなく、かなり自由に出版されていたようである。中野三敏(1985:146-148)、宗政五十緒(1982:321)、参照。

辞王逸註』の版權をめぐって京都の書物問屋臨泉堂文台屋中村治郎兵衛から訴訟を起こされ、敗訴はしたが、寛延3年(1750)には、同じく南組の須原屋一族(茂兵衛、伊八、新兵衛、市兵衛)らとともに「類板禁止の申合わせ」廃止を求めて江戸町奉行所に訴訟を起こしている。また、宝暦8年(1758)にも井上通照校訂の『易古註』を須原屋茂兵衛と相板で出版し、京都の書物問屋仲間から類板だとして販売拒否を受けている。このように江戸の書物問屋として京都に対して対抗意識を強く持っていた前川六左衛門は、積極的に江戸在住の儒学者たちの書籍の出版を手がけ、室鳩巢、井上蘭台、荻生徂徠、戸崎淡園、服部南郭などの書を次々と出版していた。²³後述するように、『古今諸家人物志』に掲載されている人物と深い関係があることがわかる。ただし、『古今諸家人物志』の奥書には板元として前川六左衛門の名は出ていない。この間の事情ははっきりしない。あるいは、『改算記綱目大全』の場合同様、書物問屋仲間に顔の利く前川が名義貸しをして出版を容易にしたのであろうか。

編者については、『古今諸家人物志』の「序文」に「村意語」、「凡例」に「村意語識」とある。また、『割印帳』には「万釈庵」とある。『国書人名辞典』²⁴には、「万釈庵十意語 (生没) 生没年未詳。江戸時代中期の人。(名号) 奥村氏。修姓、村。号、意語、十意、十意語、五極軒、万釈庵、時釈長。(経歴) 江戸の人。浄土宗の説教僧と思われ、阿弥陀如来の利益を説く説話集を編んだ。占卜に通じていた。」とある。また、『割印帳』には、

明和六年丑九月

古今諸家人物志 全三冊 万釈庵 板元 前川六左衛門
墨付百十一丁 奥むら喜兵衛

²³前川六左衛門の活動については、今田洋三(1977: 80-90)、参照。

²⁴『国書人名辞典』第4巻 p.96 岩波書店、1994年

明和六年丑九月

八卦当物秘伝 二編全二折 一冊 万积庵 板元 奥村喜兵衛
札数廿八枚

明和八卯正月

雅言小筌 折本一冊 万积庵作 板元 奥村喜兵衛
墨付壹枚刷両面

と、明和6年から8年にかけて奥村喜兵衛のところから3冊の出版をしている。『国書人名辞典』では「浄土宗の説教僧と思われ」と述べているが、果たしていかがであろうか。書物問屋の奥村喜兵衛と同姓であることも考え合わせて、喜兵衛の同族、あるいは本人の可能性もある。後述するように、『古今諸家人物志』の掲載人名は版元の佐野屋喜兵衛や前川六左衛門と交際の深い人物を中心として編纂されている。編者の万积庵奥村意語については、今のところこの程度のことしか判明しない。

2. 2 『古今諸家人物志』の記載内容

2. 2. 1 「目録」の分析

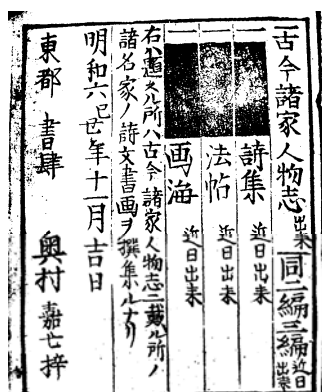
さて、『古今諸家人物志』の内容について検討してみたい。「目録」には次のように記載されている。

一 惺窩	三丁	一 宇都宮由的	廿丁
一		一 毛利貞斎	廿一丁
一 僧文之	四丁	一 藤樹 王陽明	廿二丁
一 南村梅軒	四丁	一 伊藤	廿三丁
一 木下順庵	七丁	一 徂徠	卅二丁
一 闇斎	十四丁	一 諸家	五十一丁
一 懶斎			

- 一 惕齋
- 一 貝原
- 一 投壺

目録は上下二段組みで、学派の祖の名と丁数（ページ付けに相当する）が記してある。順番は、朱子学派の（藤原）惺窩～毛利貞齋、これに続いて陽明学の（中江）藤樹、古学派の伊藤（仁齋）・（荻生）徂徠、古注学・折衷学の諸家が続き、最後に一行離して「投壺」の項目が立てられている。この順番は、「投壺」を除いて、儒学者の名簿を作るときの、当時も現在も一般的なものである。なぜ、「投壺」の項が立てられたかということについては、この項目の筆頭者田中江南の略伝の中に「宝暦五年丁亥秋八月、始開場於東叡山下教此道、而都下王孫公子從游日盛、実海内一家也」²⁵とあることから、当時流行していた「投壺」について特に項を立てたものと考えられる。ちなみに、田中江南は『古今諸家人物志』刊行の前年明和5年に『投壺矢勢図』を刊行し、明和6年には司馬温公著『投壺新格儀節』の校定本を刊行している。²⁶

この目録には「書家」・「画家」の項目がなく、さらに、一冊に綴



じてあるが、丁数は五十七丁の柱に「終」と記されており、この丁で「目録」に記載されている全ての項が終わっている。それ以降は再び「一」から始まっており、五・六丁柱には「又五」「又六」とあることから、続巻ないしは補

図1.『古今諸家人物志』奥書
 (筑波大学図書館蔵)

57丁表

(1993: 168, 173) には、次のような記録がある。

(明和五年子三月廿四日割印)
 投壺矢勢図 全部壺枚摺 作者 菊満 板元売出 西むら源六
 外ニ口伝一枚添
 明和六年丑正月
 投壺新格儀節 全一冊 宋司馬温公著 西村源六
 墨付廿二丁

卷としての性格が窺える。この後半部分には「(井上) 金峨先生門人」「(稲垣) 白崑先生門人」「(大塩) 鼈渚先生門人」「(瀧) 鶴臺先生門人」「(大内) 熊耳先生門人」「(伊東) 藍田先生門人」「(南宮) 大湫先生門生」「(細井) 平洲先生門人」「(宮瀬) 龍門先生門人」「足立清河先生(門人)」と、徂徠学・折衷学諸派が記載され、そして、「書家」・「画家」の部が続く。奥書は全体の最後尾に付けられており、全体の丁数は 82 丁である。出版申請に「墨付百十一丁」とあるのと比べると、相当に枚数が少ない。おそらく「全三冊」で刊行する予定であったものの一部分を合冊にして出版したものであろう。本文の最後尾に「右之外翫弄画能門人明和六年迄有二百有余人」とあり、また、「奥書」広告に「同二編三編近日常出来」とあるから、出版の準備の段階である程度準備が進んでいたものであろう。しかしながら、本論で取り上げた『古今諸家人物志』は本編部分が全て儒学者の名簿という形をとっている。そして、続編部分も、前 11 丁は儒学者の項目で、次に「書」10 丁、「画」5 丁が続く形をとっている。(図 1 参照)

2. 2. 2 記載人物の範囲

つぎに、記載されている人物がどのような範囲であるか、検討したい。まず、「凡例」を見てみたい。

- 一 此編為古今儒者及書画士略伝。故記其人郷里姓名家号生死年算而已。如其行状待能文之士。
- 一 凡於專業者乃称儒家書家画家。其不称家者但好事之徒而已。
- 一 (記載なし)
- 一 此編記木順庵物徂徠二先生門人殊為詳悉。其他十中録二三。待異日当追補。
- 一 諸家著述之書未刊行者、各黒点以分刻本。且訓点校正之書名詳記之。凡無卷数者一冊而已。如書名乃抄仙鶴堂書目。
- 一 諸家名目從聞見之前後而起之。非私所次第云。

と述べて、①古今の儒者・書家・画家を所収する、②略伝・郷里・姓名・家号・生死年算・著書を掲載すると刊行目的を述べている。また、木下順庵門下、荻生徂徠門下を中心に編纂したと述べている。「凡例」に「此の編は木順庵・物徂徠二先生の門人を記すこと殊に詳悉たり。其の他は十中に二三を録す。(原漢文)」と述べている。表3によって収録人数を見ると、朱子学派68名のうち、木下順庵門が34名で半数を占めている。しかも、木下順庵門の内、15名は江戸で活動した室鳩巢の門下生で、また、8名は室鳩巢の門下生である河口静斎の弟子であるから、木下順庵門といっても、その大部分が江戸で活躍した室鳩巢の門下生で占められている。また、荻生徂徠門は132名である。²⁷

表3. 明和6年『古今諸家人物志』記載人名分野別分類

	(内)	(内)	物故者	現存者
儒者	256 61.2%		87 34.0%	169 66.0%
	朱子学	68 26.6%	46 67.6%	22 32.4%
		木下順庵門	34 18 52.9%	16 47.1%
		陽明学	5 100.0%	0 0.0%
		仁斎学	7 57.1%	3 42.9%
		徂徠学	132 16.7%	110 83.3%
		投壺	7 0 0.0%	7 100.0%
		諸家	44 22.7%	34 77.3%
書家	112 26.8%		6 5.4%	106 94.6%
画家	51 12.2%		0 0.0%	51 100.0%
計	418		93 22.2%	325 77.8%

注：重複 多田蒙斎は室鳩巢と三宅尚斎（いずれも朱子学）の双方に記載
 田中江南は大内熊耳の門人と投壺（いずれも徂徠学）の双方に記載
 関根栄次郎は画家と書家の双方に記載
 朱子学・陽明学などの比率は儒者のうちの比率
 木下順庵門の比率は朱子学の中の比率

『古今諸家人物志』の総掲載人物数は421名であるが、表3の注に述べたように3名の重複がある。²⁸したがって掲載人名数は418

²⁷ 荻生徂徠の門下として項目に記載された人物は59名である。このほかに、諸家として、徂徠門下で別項が立てられたものとして、大内熊耳・宮瀬龍門・足立清河がいる。また、「投壺」とあるのは、徂徠門下の田中江南が投壺礼の復活を目指して活動していたものを特に別項に立てたものである。続編の稲垣白嵩門人・大塩鰐渚門人・瀧鶴臺門人・大内熊耳門人・伊東藍田門人・宮瀬龍門門人・足立清河門人も徂徠門下と区分される。したがって、これらの者も荻生徂徠門に合算する。

²⁸ この『古今諸家人物志』の出版された近世中期においては、特に荻生徂徠の

名である。この重複問題は、『古今諸家人物志』が分野別、学派別に編集されていることから発生する。別の分野で師弟関係がある場合にはその双方に記載されることになるからである。

まず、掲載人物の分野別分類であるが、儒者が 256 名で 61.2 パーセントを占めている。これを、後述する記載分量と重ねてみるならば、基本的に、『古今諸家人物志』は儒学者を中心として編纂された人名録といえることができる。

さて、掲載人物のうち、天明 6 年『古今諸家人物志』刊行時の現存者と物故者とを比較してみたいと思うが、ここで物故者と数えたのは注 28 にも述べたように、死亡が確認されたもののみであるから、物故者の数値が今後確認されれば大きくなる可能性はあるが、確認できないものの多くがこの『古今諸家人物志』に 2 行程度記載がある以外に今のところ記録がない者が大半であるので、あまり期待できない。したがって、この数値が大きく変わることはあまりないであろう。

物故者の総数は 93 名で、22.2 パーセントである。したがって、この『古今諸家人物志』が現在生きている人物を中心に編纂されているとみなすことができる。ただし、分野・学派によってその比率は大きく異なる。朱子学派 68 名のうち物故者は 46 名、67.6 パーセントである。これを、木下順庵門下を除いた場合は、34 名中 28 名、82.4 パーセントになる。また、陽明学派は 5 名全てが物故者である。これに比べて、徂徠学派の場合は、132 名中、物故者は 22 名で、その占める割合は 16.7 パーセントに過ぎない。また、諸家として項目に掲げてある折衷学・古注学の場合は、44 名中 10 名で、22.7 パーセントである。表 4 は続編に当たる部分のみを分析したものである。

影響から中国風の一字姓を名乗ることが流行したため、姓が判明しにくい。
(例えば、荻生徂徠は物部が本姓であるとして、「物徂徠」と名乗っていた。) したがって、3 名以外にも、儒者として掲載されている場合と書家・画家として掲載されている場合に姓が異なっていて重複している可能性があるが、一応、姓以外の名・字・号・通称などを検討して確定した。また、表 3 の物故者として数えたものは、同書の中に記載があるものと、長澤孝三(1979)によって確認されたものを合計したものである。したがって、これ以外の人物が必ずしも明和 6 年時点で生存しているとは限らない。

ここに記載されている儒者 78 名のうち 75 名、96.2 パーセントが現存者である。書家の場合は 112 名中 106 名で、94.6 パーセント、画家の場合は 51 名中 51 名、100 パーセントである。以上のことをまとめると、朱子学（室鳩巢の門人を除く）と陽明学の場合は、物故者を中心として記載され、徂徠学・折衷学・古注学・書家・画家は現存者中心に編纂されているといえよう。また、続編は現存者を中心として編纂されていることが分かる。

表 4. 『古今諸家人物志』後編部分の分野別分類

	内		物故者		現存者	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
儒者	78	32.4%	3	3.8%	75	96.2%
			徂徠学	63 80.8%	0 0.0%	63 100.0%
			諸家	15 19.2%	3 20.0%	12 80.0%
書家	112	46.5%	6	5.4%	106	94.6%
画家	51	21.2%	0	0.0%	51	100.0%
計	241		9	3.7%	232	96.3%

2. 2. 3 記載事項の分析

つぎに、記載事項について見てみたい。この『古今諸家人物志』は略伝と著書目録が付いていることが文雅人名録と異なる。しかしながら、記載されている全ての人物にこの略伝と著者目録がついて

表 5. 『古今諸家人物志』記載事項

	略伝・著書あり		略伝あり		著書あり		略伝・著書なし	
	総数	割合	総数	割合	総数	割合	総数	割合
朱子学	69	14.5%	13	18.8%	11	15.9%	35	50.7%
陽明学	5	40.0%	1	20.0%	0	0.0%	2	40.0%
仁斎学	7	28.6%	0	0.0%	0	0.0%	5	71.4%
徂徠学	70	20.0%	5	7.1%	15	21.4%	36	51.4%
諸家	29	10.3%	2	6.9%	13	44.8%	11	37.9%
本編計	180	17.2%	21	11.7%	39	21.7%	89	49.4%
徂徠学	63	0.0%	1	1.6%	6	9.5%	56	88.9%
諸家	15	0.0%	2	13.3%	0	0.0%	13	86.7%
書家	112	0.0%	1	0.9%	2	1.8%	109	97.3%
画家	51	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	51	100.0%
後編計	241	0.0%	4	1.7%	8	3.3%	229	95.0%
総計	421	7.4%	25	5.9%	47	11.2%	318	75.5%

注：重複した3名についてもそれぞれの項目で集計した

いるわけではない。表 5 は記載人物について、略伝・著書の記載の有無を分析したものである。本編部分

分では、略伝・著書のいずれかの記載があるものが 50.6 パーセントである。これに比べて、続編部分では 5.0 パーセントと少ない。特に、書家では 112 名中略伝のあるもの 1 名、著書の記載のあるもの

2名以外は略伝・著書とも記載がない。また、画家の場合は、全て略伝・著書とも記載がない。これは、本編と後編で編集の考え方が明らかに違っていることを意味するであろう。

表6-1, 2は記載者一人当たりの記載分量を集計したものである。本編部分では、物故者の記載量は5~9行が中心で、現存者の記載量は2~3行となっている。後編部分では若干の物故者を除いて儒学者・画家では2~3行、書家では1~2行となっている。ちなみに、本編の加重平均は5.08行、うち、物故者の場合は7.29行、現存者の場合は1.80行になる。続編の儒学者の加重平均は2.67行、物故者の場合は4.67行、現存者の場合は2.59行になる。書家の加重平均は1.55行、画家は全員2行である。

表6-1. 『古今諸家人物志』の記載分量別分類 本編部分

儒学者	総数	物故者		現存者		
20行以上	7	2.7%	7	8.0%	0	0.0%
10~14	11	4.3%	9	10.3%	2	1.2%
5~9行	43	16.7%	30	34.5%	13	7.6%
4行	28	10.9%	14	16.1%	14	8.2%
3行	85	32.9%	14	16.1%	71	41.5%
2行	67	26.0%	8	9.2%	59	34.5%
1行	17	6.6%	5	5.7%	12	7.0%
計	258		87		171	

表6-2. 『古今諸家人物志』の記載分量別分類 後編部分

儒学者	総数	物故者		現存者		
5行	2	2.6%	2	66.7%	0	0.0%
4行	4	5.1%	1	33.3%	3	4.0%
3行	38	48.7%	0	0.0%	38	50.7%
2行	34	43.6%	0	0.0%	34	45.3%
1行	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
計	78		3		75	
書家	総数	物故者		現存者		
4行	1	0.9%	1	0.9%	0	0.0%
3行	2	1.8%	1	0.9%	1	0.9%
2行	55	49.1%	4	3.6%	51	45.5%
1行	54	48.2%	0	0.0%	54	48.2%
計	112		6	5.4%	106	94.6%
画家	総数	物故者		現存者		
2行	51	100.0%	0	0.0%	51	100.0%
計	51		0	0.0%	51	100.0%

注：重複した3名についてもそれぞれの項目で集計した

最も行数の多いのは太宰春台で48行である。是に次いで山崎闇齋(47行)、荻生徂徠(35行)、伊藤仁斎(27行)、新井白石(23

行)、貝原益軒(22行)、伊藤東涯(21行)などが20行以上の記載で続く。いずれも物故者である。

図2に太宰春台の項の冒頭部分の写真を掲載した。薄い美濃紙を使用しているため裏写りして読みにくいが、卅四丁表から卅五丁裏にわたって、4ページを使って記載されている。冒頭の「門人」とあるのは、その前の記載に続いて荻生徂徠の門人であることを表わす。1行目の下の「紫芝園」は号、「弥右衛門」は通称である。2行目には「姓太宰 諱純 字徳夫 号春臺」が記載されている。3行目は空白で4行目以降かなり詳細な略伝と著書が記載されている。

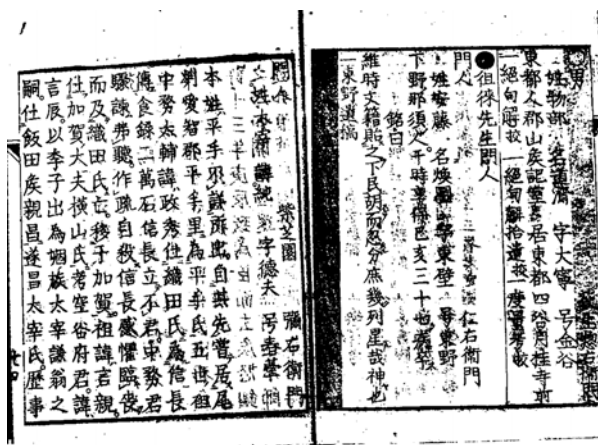


図2. 『古今諸家人物志』33丁裏・34丁表

これと比較するために現存者の記載がどのようになっているか、図3に掲げた。図3は、美仲先生(=板倉璜溪・徂徠門人)門人と南溟先生(=入江南溟・徂徠門人)門生の部分である。美仲先生門人の2名はそれぞれ3行を使って記載されている。そして、南溟先生門生の4名はそれぞれ2行を使って記載されている。このうち、

物故者は南溟先生門生の希施愚溪だけである。ただし、没年などの記載はなく、ただ、末尾に「卒ス」とあるだけである。記載内容は、師弟関

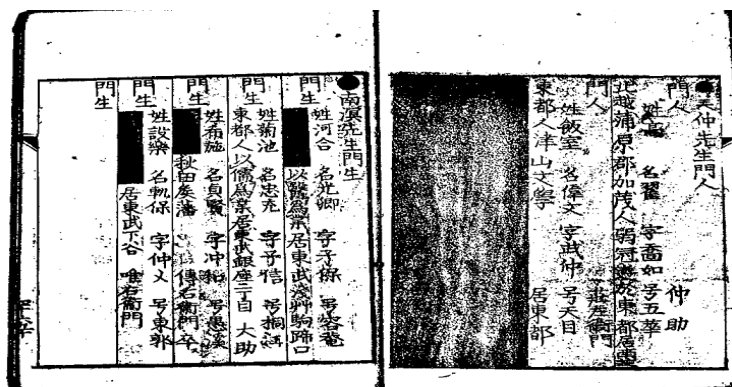


図3. 『古今諸家人物志』45丁裏・46丁表

係（門人、門生）を冒頭に掲げ、共通事項として姓・名・字・号・通称が記され、出身地・現住所・職業などが記されている。

なお、黒くなっている四角の部分は板木を彫っていない部分である。これは、刊行後に判明した場合に書き込めるようにそのままにしておいてあるものである。南溟先生門生の3名にある黒い部分は他の項目から考えて、出身地を書き込む予定であろう。また、天明6年刊行時には美仲先生門人として2名しか掲載できなかったが、以後増補することを予定して45丁裏の後半部分が未刻のままにしてあるのであろう。このような事情から、この種の人名録には、異本が大変に多くなる。

さて、太宰春台の項目との比較であるが、春台の項の2行目までと、書式・内容が同一であることがわかる。すなわち、2～3行で記載されている共通の事項の後ろに、略伝・著書などを付け加える形で全体が構成されている。現存者の大部分が記載量2～3行であることと重ね合わせるならば、この『古今諸家人物志』の基本的記載事項がこの2～3行の記載であって、これに物故者や現存者の著名な人物については略伝や著書を書き加える形であることがわかる。

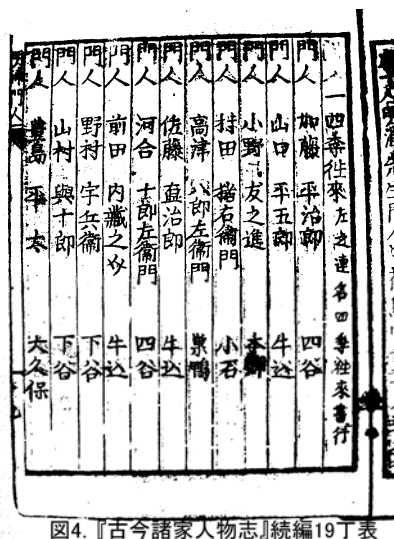


図4.『古今諸家人物志』続編19丁表

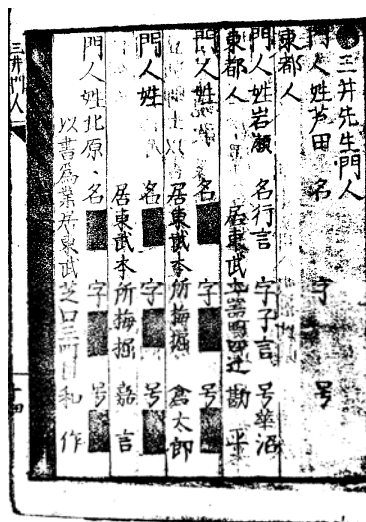


図5.『古今諸家人物志』続編14丁表

ところで、書家の部には、約半数の1行書きの人物がいる。一例を図4に掲げておいた。1行目は前項の記載の続きである。2行目以降、「明浦先生門人」の11名の人物が掲載されている。記載されている内容は、姓・通称・現住所のみである。儒学者に比べて記載

内容が乏しい。

また、図5に見られるように、通称と現住所しか記載されていないものもある。江戸本所梅堀に住んでいる「倉太郎」と「嘉吉」が三井先生の門人である以外にまったく情報がない。姓が白く（つまりは「無い」という意味である）名・字・号が黒く（つまりは「不明」という意味である）されていることから推察すれば、町人身分の者、おそらくは町の手習い師匠をしている人物ではなかろうか。このような人物が藤原惺窩や荻生徂徠といった歴々の大儒学者と同一の書物に並べられることこそが、「古今」の諸家を集めた本書の意義であるとも言えよう。紙数の関係で本稿では考察の対象とすることは出来ないが、幕末に出版された『安政文雅人名録』『文久文雅人名録』にはこのような人物が大量に、しかも、同一の規格＝同格で記載されるようになる。しかしながら、この『古今諸家人物志』では、これらの人物の扱いは決して十分に尊重されているものとなっていない。

2. 2. 4 記載人物の所在地の分析

表7. 『古今諸家人物志』記載人物の住所と出身地（物故者を除く）

	総数	居所		出身地		記載あり	記載なし
		(内) 江戸	(内) 江戸	(内) 江戸	(内) 江戸		
儒者	169	63	123	138	31		
		49	54	79			
(内) 木下門	16	4	12	12	4		
		4	4	5			
(内) 闇齋学	6	2	2	4	2		
		1	0	1			
(内) 仁齋学	3	2	3	3	0		
		0	0	0			
(内) 徂徠学	110	38	80	92	18		
		32	43	59			
(内) 折衷学	34	17	26	27	7		
		12	7	14			
書家	106	60	39	91	15		
		56	28	81			
画家	51	30	33	47	4		
		25	24	38			
計	325	152	195	275	50		
(内) 江戸		129	106	197			

注：書家と画家に重複（江戸在住）があるので計は補正してある

つぎに、現存者について地域的にどのような特徴があるかを分析したい。表7は現存者に限ってその出身地・現住所の記載を分類したものである。325名のうち、出身地・現住所の記載がまったくないものは50名、15.4パーセントに過ぎない。すなわち、この『古今諸家人物志』は、現存

者に関してはその住所がわかるようにすることを基本的方針としていると言ってもいいであろう。さて、「東都人」のように江戸出身であることが明らかな者は106名、また、「居東都」のように江戸在住であることが明らかな者は129名、重複を除くと、197名の者が江戸の人物であることが分かる。これは全体の60.6パーセント（記載のあるものの中の比率では71.6パーセント）を占めている。特に、書家・画家に関しては、77.0パーセントのものが江戸在住ないしは江戸出身者で占められている。したがってこの『古今諸家人物志』が、江戸で活動した者を中心として編纂されたものであることが知られる。

2.3 明和6年刊『古今諸家人物志』の性格

この『古今諸家人物志』が出版された明和6年（1769）に、京都において『儒林姓名録』が刊行されてい

表8. 明和6年刊『儒林姓名録』記載人名
記載行数

	計	14行	8行	6行	5行	4行	2行
朱子学派	83 51.6%	0	2	10	1	43	27
陽明学派	3 1.9%	0	0	1	0	2	0
古義学派	14 8.7%	0	1	1	0	6	6
徂徠学派	43 26.7%	1	1	1	0	11	29
古注・折衷学	7 4.3%	0	0	1	0	2	4
医師・本草学	9 5.6%	0	0	0	0	7	2
不明	2 1.2%	0	0	0	0	0	2
計	161	1	4	14	1	71	70

る。表8に集計しておいたが、161名の儒学者・医者を集め、学派別・年代順に並べ、姓名・字・号・略歴・著書が記されている。記載されている人物は全てこの『儒林姓名録』が刊行された明和6年には物故者である。この『儒林姓名録』に記載されたうち半数の83名は朱子学者である。また、徂徠学者は43名、古注学・折衷学者（＝諸家）は7名である。これを表3の『古今諸家人物志』の記載数（朱子学者68名、徂徠学者132名、諸家44名）と比較するならば、その違いが顕著である。また、『古今諸家人物志』記載の朱子学者の物故者46名、徂徠学者の物故者22名はその比率が『儒林姓名録』のものと同じである。このことから、『古今人物志』は、享保以降、江戸において隆盛を見た徂徠学と、その後新しく勃興した折衷学を大

きく取り上げているといえよう。そしてこれは、徂徠学派や折衷学派の明和の「現在」に生きている人物を多く掲載することで生じた特徴である。

『古今諸家人物志』を出版した佐野屋喜兵衛は多様な書物の出版元であって、その幅広い交際を下地に人名録の出版を企画したものと思われる。彼が前年に京都で出版された『平安人物志』の江戸での販売元であることから、これに刺激されて企画したのかもしれない。しかしながら、その出版した『古今諸家人物志』は中途半端なものになってしまっている。物故者についてはかなり詳細な略伝・著書を記載しているものの、現存者については、十分な記載が出来ていない。最低限の姓名すら明確に出来ないものも見られる。また、分野的には儒学に偏り、しかも、徂徠学派・室鳩巢門下に偏り、他分野の把握が十分になされていない。地域的には江戸を中心として編纂されているが、物故者を入れ、その他の地方の人物も含んでいるために、「何を集めた人名録なのか」性格がはっきりしなくなっている。

付言：本稿では、現在の大阪府大阪市に当たる地域名称として、近世の名称である「大坂」をもちいている。

参考文献

1. 朝倉治彦・大和博幸編、『享保以後江戸出版書目 新訂版』、東京：臨川書店、1993。
2. 井上和雄編、『慶長以来書賈集覧』、京都：叢文堂、1916。
3. 上里春生、『江戸書籍商史』、東京：名著刊行会、1965。
4. 今田洋三、『江戸の本屋さん』、東京：日本放送出版協会、1977。
5. 『国書人名辞典』第4巻、東京：岩波書店、1994。

6. 坂本宗子編、『享保以後板元別書籍目録』、大坂：清文堂出版、1982。
。
7. 長澤孝三編、『漢文学者総覧』、東京：汲古書院、1979。
8. 中野三敏、『江戸名物評判記案内』、東京：岩波書店、1985。
9. 西山松之助編、『江戸三百年② 江戸っ子の誕生』、東京：講談社、1975。
10. 西山松之助、『大江戸の文化』、東京：日本放送出版協会、1981。
。
11. 三宅正彦、『京都町衆伊藤仁斎の思想形成』、京都：思文閣、1987。
。
12. 宗政五十緒、『近世京都出版文化の研究』、京都：同朋舎出版、1982。
13. 森銑三、『読書日記』、『森銑三著作集続編 第14巻』、東京：中央公論社、1994。
14. 矢野玄亮、『徳川時代出版者出版物集覧』、仙台：万葉堂書店、1976。
15. 小林幸夫、「近世後期における江戸在住の知識人の動向」、『地方史研究』216号、（東京：地方史研究協議会、1988）27-36。

資料

1. 万积庵十意語、『古今諸家人物志』、板本、筑波大学図書館蔵、明和6年（1769）。
2. 毛必華（曾谷之唯）、『浪華郷友録』、板本、安永4年（1775）。
3. 永忠原、『儒林姓名録』、板本、筑波大学図書館蔵、明和6年（1769）。
。
4. 弄翰子、『平安人物志』（初篇）、板本、明和5年（1768）。
5. 青柳文蔵、『続諸家人物誌』、写本、長野県飯田市立図書館蔵、文政12年（1829）。

6. 金華堂（須原屋佐助）、『江戸現在広益諸家人名録三集』、板本、筑波大学図書館蔵、文久元年（1861）。